

ローマ人への手紙 第13章 8節

「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。」

このみことばを繰り返し聞きながら、使信の送り手パウロのこころ深く触れたいと願う。それは、他ならない主のみこころ深く触れることである。手紙を受け取ったローマ教会はパウロからの使信に良き知らせを聞く期待を持って必死に文字を追ひ、読んだと思う。彼らがおかれている状況が厳しいからこそ、手紙の文字が彼らの魂を揺さぶり、立ち上がらせたと思う。受け手の彼らにとり、そのとき無くてはならない言葉であったと思う。

帝国の規則、競争社会、支配者から下される罰則規定のなかにあって兄弟姉妹に響いた文字は、愛です。パウロの指摘を受け手たちはどのように聞くことができだろうか。帝国の圧迫下で、信仰生活、教会が厳しいなかにあるキリスト者たちに愛の人であれと勧めます。そして、その愛は消えない負債であると続けます。

当時の大帝国下に、生まれたばかりの弱小集団、あなたがたの歩むべき道があります。それが、愛の人の道です。互いに愛し、だれに対しても愛の人であることです。